

第5回 感染症科学研究センター研究セミナー開催概要報告

平素より、当センターにご理解いただきまして、誠にありがとうございます。

第5回の研究セミナーを開催いたしました。猛暑の中、20名の方にご参加いただきました。ご参加いただいた皆様ありがとうございました。下記に開催概要をまとめましたのでご覧ください。

感染症科学研究センター長 金子 明

日時：2018年7月12日（木） 17時30分～19時00分

場所：阿倍野キャンパス学舎1階 応接室

内容

- ・ センター長挨拶 センター長 金子明教授（寄生虫学）



- ・ 医学研究科細菌学 老沼 研一 先生

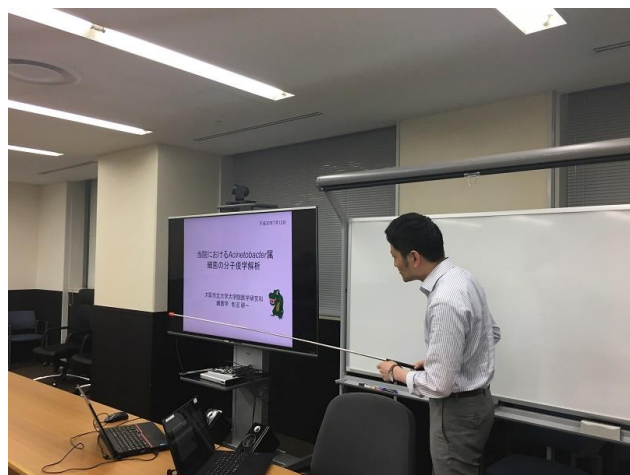
「当院における *Acinetobacter* 属細菌の分子疫学解析」

アシネトバクターは世界的に耐性菌の増加が問題となっている。また、アシネトバクターは菌種同定が難しく、正確な同定には遺伝子レベルでの検査が必要になる。今回は、当院において分離された血液由来アシネトバクターを対象に検討した。その結果、13BJ/14TU という日本ではこれまでに分離されたことのない菌種が分離された。本株は韓国においてしばしば分離される菌種であり、コリスチンに自然耐性であることが示されている。

血液由来ではないが、

カルバペネム耐性 *Acinetobacter baumannii* が分離され、ゲノム解析を実施した。

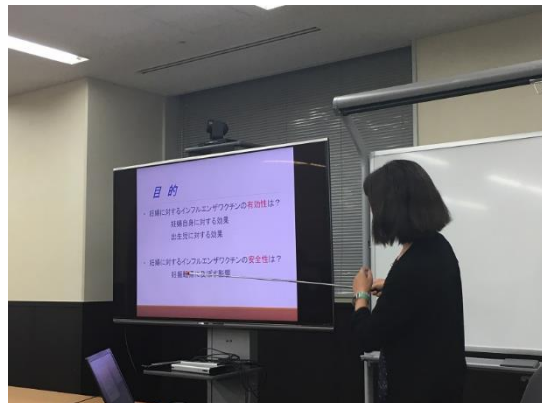
興味深いことに、3つのカルバペネマーゼを有する珍しい株であることが判明した。



- ・ 医学研究科公衆衛生学 大藤 さとこ 先生

「妊婦に対するインフルエンザワクチンの有効性と安全性」

当教室では、前任の廣田教授在籍時より、ワクチンで予防可能な感染症（VPD）に関する調査を行っており、インフルエンザワクチンは重要な研究テーマの一つである。VPDの疾病負担、ワクチンの免疫原性、ワクチンの有効性に関するデータを得るため、産婦人科の古山教授の協力を得て前向きコホート研究を実施した。妊婦2万人強を登録し、2013/2014シーズンのインフルエンザワクチン接種に関する出生児の特性と妊婦の特性を評価した。妊娠中に接種しても、出産後に接種しても出生児がインフルエンザになりにくいという結果等が得られ、妊婦に対するワクチン接種の安全性も確認された。



- ・ 東京大学大学院医学系研究科・小児科学講座・循環器学講座 中釜 悠 先生

「シャーガス病の病態モデル構築と分子疫学研究についてのエルサルバドル国との国際研究」

シャーガス病は、アメリカトリパノソーマを病原体とする寄生虫疾患である。ラテンアメリカやカリブ諸国で蔓延するシシガメという昆虫に媒介されて感染する。世界的には600～700万人の感染者がいると推定されているが、地域が限定されていることなどから、orphan疾患、neglected tropical diseases（顧みられない熱帯病）の一つである。実は、日本でも感染者が3000人程度いることも推定されている。

慢性シャーガス病心筋症を起こすことも知られており、東京大学小児科・循環器科では細胞の代謝の研究を実施していたことから、現在慢性シャーガス病心筋症の病態解析を共同で実施している。



【特別講演】

- ・ 経済学研究科 脇村 孝平 先生

「『熱帯の大分岐』とマラリア：サブサハラ・アフリカと東南アジア」

開発途上国の研究として、インドの研究を開始した。当初は現代の研究をしていたが、次第に歴史研究に傾いた。歴史研究には資料が必要で、19世紀後半の時期、イギリスの植民地であったころの資料をニューデリーの公文書館で研究した。4～500万人がなくなる飢饉が起こったが、飢饉の時に起こった疫病の研究をするように指導教員に指示され、マラリアの研究につながった。マラリアの対策としては、歴史的には2つのアプローチがあり、病原体

である原虫に対するものと、媒介生物である蚊に対するものがある。1950年代後半にマラリア撲滅計画が計画されたが、マラリア対策が進まない理由として、単にアプローチの問題にとどまらないことがわかってきた。

マラリアを中途半端に減らすと獲得免疫が喪失し、逆にマラリア罹患を悪化させるという議論等があり、マラリア対策を阻害している要因として、文化的歴史的要因や社会経済的な要因が深く関係しているため、技術的な手段とともに歴史的・社会的な研究も必要である。



会終了後、懇親会を開催しました。



謝辞

ご発表の演者の皆様、ご出席の皆様誠にありがとうございました。また、今回の準備に際し、多大なるご協力をいただきました事務方の皆様にも感謝いたします。ありがとうございました。